

A photograph of Earth from space, showing a satellite in the foreground. The Chinese character '星' (Star) is overlaid in the center. The character is white with a blue glow and a blue arrow pointing left from its left side. The background shows the Earth's surface with clouds and a portion of the satellite's solar panels.

星

www.columnland.net

愛を語るとき「同じ星に生まれたから」だとか
「六十億分の一の奇跡」だとかいう人はいるかもね。

でも心の底から大好きなきみと出会えたのは
そんな偶然じゃなくて必然だと思う。

一年に七月七日の一回しか逢えなくなったら
きみを愛しぬいて見せるから。

今年もカササギのかけてくれた橋にのって
きみに逢いに行くよ。

儀のあい星

何が★いの？

文化祭の打ち合わせ中、先輩のアカウントのメールボックスを開いて、サークルの資料送信用のメールアドレスを確認する。もちろん許可はとってある。

なぜこんなことをしているかというところ、自分は年度途中から参加したので、年度初めの議事録を見られないからだった。バックアップをもらう技術もなく、メールアドレス登録の手続きすら面倒だと思っていたところ、先輩の厚意でアカウントを共用にもらったのだ。

新着メールは七件だった。

- 【★苺みるくさんから写真付き新着メッセージが来ています】
 ☆☆☆女子校生の●●です♪今度会えますか？☆☆☆
 [(サークル名)ー378] 会計と今後の予定
 【★初めまして、▲▲と申します。3◆歳の人妻なのですが最近…
 【★現役ホストの○○だよ。写真見てくださいないかな？良かったら…
 ☆☆☆出会いたい女子校生がいっぱい！詳細はこちら！☆☆☆
 [(サークル名)ー379] ビラの仮デザイン 元のデータ送ります

視線だけがパソコンの画面から、ご本人に移動する。

真面目な表情で打ち合わせの進行をやり、その合間に後輩の作業まで手伝っている。

隠す気配が全くないのは男気というものだろうか。そういえば、

「身に覚えがないんだけどー、何かの抽選に当たったっぽくてさあー」

「そんなに怪しいサイト見てないよ！一回だけだった！」

とか何とか言っていた気がする。

無言で大量の「テンプレート」を読み、メールを送信した。

送信先 … ◎▲□●●◆△○.com

送信者 … ●◆@□◇.com

件名 … 【★お世話になってます★】

本文 … メールアドレスや個人情報の登録は慎重にしたほうがいいかもしれません

あと、出会い系は気をつけてくださいね！

金色の星

（今日もまた負けた……。どうして勝てないんだらう。）

明星山はため息をついた。明星山の成績は七日目時点で二勝五敗。しかも明日は横綱戦が控えている。

（やっと前頭二枚目まで来たのに、これじゃ来場所三役入りは無理だな……）

部屋に入ると親方が待っていた。どうして勝てないのか、と聞くと少し考えた後、

「星を見るな。」と一言言った。

「えっ？」

「おまえは早く勝ちたい、白星が欲しい、そんなことしか考えず土俵に上がっているだろう。

立ち合いで横に動こうとしたりはいたり、おまえはただ、白星を得ることしか考えていない。

それではだめだ。いつも言っているが、勝ちにこだわらない自分の相撲を取る、そこに結果がついてくるんだ。そしてなにより大事なの

は、誰かのために相撲を取る、そういう気持ちだ。わかるか？」

「星を見るな、ですか……」

「俺が言いたいのはだなー、そうだ、そういうえば、昔、こういうことがあったな……。うちの娘が星空のきれいな夜にベランダで星を見ていた俺がちよつと目を離れた時、娘がベランダから落っこちそうになったんだ。その時はあわてて俺が押さえたから落ちなかったんだけどな。どうやら娘は星に気を取られていて、足元に注意がいかなかったらしい。——おまえは今そういう状態なんだ。本質でないものに気を取られていて、もっと大事なものに気付かず、足元が危うい状態なんだ。ま、おいおい分かってくるだろう。今日はもう寝てゆつくり休め。」

その夜、明星山が風呂から上がると、彼の父親から電話がかかってきた。

「どうしたの？ めずらしいね、父さんが電話をかけてくるなんて。」

「実は、明日母さんと二人で相撲を見に行く事にしたんだ。それを伝えるために電話したんだが、実はその……。これは母さんから場所が終わるまでおまえには話すなって口止めされているんだが、母さんになんが見つかつたんだ。それで、明後日から入院することになって、母さんが最後におまえの相撲を見たいって言うて……」

結局その夜、明星山は一睡もすることができなかった。

翌日、明星山は朝から自分の取り組み前まで、ずっと悩んでいた。頭の中はぐちゃぐちゃで、横綱に対する対策など全く考えていなかった。結びの触れが行われ、明星山は土俵に上がったとたん頭が真っ白になった。塩を持つ手が震え、仕切りの間、足がぐくぐくしていた。そんな時、

「明星山、頑張れ！」

という大きな声があった。そこでは母さんが座席から立ち上がって声を張り上げていた。

「母さん……」

思わずつぶやいた次の瞬間、明星山は体から緊張が消えていた。（母さんに自分にできる最高のいい相撲を見せたい！）それは彼が今まで相撲を取ってきて初めて経験する感情だった。

明星山は仕切り線に手を置き、相手を見据えた。一瞬の静寂の後、両者は激しくぶつかりあった。彼は押し相撲を得意としていた。明星山は必死で思い横綱の体に突っ張りをうった。何度もまわしをつかまれそうになりそのたびに、より力を込め押した。いつもは出ないような力がでていた。そして、五二秒もの熱戦ののちついに、明星山は、横綱を押し出した。

明星山は勝つたその瞬間のことは、全く覚えていなかった。ただ、客席で母さんが笑いながら泣いていたこと、そして、自分もが、土俵に一つ涙を落とし、小さなしみをつくつたことだけは、はつきりと覚えていた。

一月一日

本船は強い重力場に捕まった。もう逃げられない。救助が来るまで生き抜くしかない。

一月二十五日

床の清掃のため水をまいたところ、排水溝が詰まっていたらしく、水が引かなくなった。

二月十五日

水を蒸発させるため、熱した石をまき始めることにする。

二月二十五日

水中に新種の生物を発見。この特殊な環境が生み出したのだろうか。

六月二十五日

暑さ対策のため、時々床の表面を凍らせることにする。

八月三日

床暖房を誤って起動したところ、床上の水が激減。床面が見え始めた。

十一月十四日

床のくぼみに水がたまってしまったが、床が使える状態になった。

水中では、以前発見した生物が進化し続けているようだ。

十一月二十五日

床に植物が生え始めた。

十二月三日

ついに水中から脚をもった生物が床にあがってきた。

十二月十二日

進化を繰り返す生物たちの駆除作業を行った。

十二月十三日

生き残っていたものが一気に進化。巨大爬虫類が大量発生した。

十二月二十六日

巨大爬虫類の完全駆除に成功。

十二月三十一日

突然細長い小動物が現れた。やつらは爆発的に増殖、本船は一気にのつとられた。さらにやつらは本船の破壊活動を開始。空調システム、船体防護シールド、浄水器など主要システムがことごとく破壊されていく。我々はもう助からない。全てをあきらめ、この小動物を外に逃がさないよう、本船を爆破することに決定した。なお、この小動物を「1」の字に近い造形であることから「ヒト」と名付けることにする。

宇宙船地球号の一年

「星と文明」

記号の中でも星マークとは非常に便利なもののひとつである。利用法としては様々なものがある。

たとえば、公衆におおっぴらに見せてはならないものを覆い隠す場合、星マークは利用される。テレビ番組で女性の裸体をうつつとき部分的に星マークで隠されているのを見たことはないだろうか。あのような隠し方になぜ星マークが利用されているか、あなたがたはご存じないだろう。実はあの星マークはふざけているようでかなりの深い意味をもつのである。

まず、星は希望・光などを示す。レストランの質を示す値としても用いられるなど、星マークは良いイメージを持たれている。また、星は神話などとも密接な関係があり、小説や映画、音楽などでも浪漫的で素晴らしい題材としても活躍する。

そして、局所を隠すという行為は知性の表れを示す。アダムとイブは知恵の実を食したことで恥じらいをもつようになったと聖書にもかかれている。知恵を得たことにより、彼らは全裸で過ごすことをやめ、文明人として生きることができるようになったのである。恥じらいは文化であると言っても過言ではない。

隠すという行為は、その対象を目に触れさせないことで人々の想像をかきたてる。隠された部分に無限の神秘、夢、希望が秘められているのである。怪人二十面相がもしもその素顔をさらしてしまっていたら魅力も半減である。あのマスクにこそ彼の神秘性が宿るのである。

先に述べた考察から、局所を隠す場合に用いられる星マークは、知性をもった人間の、女性の胸に対する夢、希望、神秘性をこめた究極的な文明の結果と言えよう。あの一見「隠す意味ねーじゃん（笑）」とすら言える星マークは、実は必要不可欠なものであったのである。

『鏡』

今から500年後、現在より遙かに進歩した技術で作られた天体望遠鏡により、地球とほぼ同じ環境であると判断された惑星が見つかった。そこは地球からとても遠く困難な旅になることが予想されたが幾人もの有志によりその星への航海が実行された。

その星へと向かう航海の途中、ちようど道程の半分にさしかかろうかという時だった。周りになにもないはずの空間でロケットが突然爆発してしまおうという思わぬ事態が発生したのだ。この事態に対し地球にある本部は爆発する直前までの情報を調査し、ロケットは何か障害物にぶつかり爆発したことを突き止めた。また本部は謎の障害物を発見するため今ある天体望遠鏡を改良し、さらに高性能なものにした。しかしそれでも障害物になるような何かをその宙域に発見することはかなわなかった。研究者たちは絶望し今や届かぬその星を今一度見ようと、望遠鏡のレンズを向けた。

そしてそこには望遠鏡でこちらを覗き込む自分たちの姿が見えた。

プラネタリウム

三つ真っ直ぐに並んだやつがあるじゃん。

それがオリオン座。

オリオン座のベテルギウスは、冬の大三角の一つなんだ。

ほら、近くにもう二つでっかいのがあるだろう？

もう少し上の方を見るとさ、はっきりとWの字が見える。

それがカシオペヤ座だ。

夜空に浮かんでるのを見たことあるんじゃないかな。

夜空でも、ひときわ目立ってるからさ。

カシオペヤ座からちょっと進むと、北極星があるんだ。

で、反対側には北斗七星がある。

北斗七星ってさ、おおぐま座の尻尾の部分なんだ。

見てるといろいろ楽しくて、時の流れも忘れそうになる。

すーじーだろ？

俺の吹き出物。

第1章 星の破壊者 Star Breaker

「お前達には、とある惑星に向かつてもらう」

上官は俺達に向かつてそう言い放った。

「知っての通り、今地球で様々な資源の枯渇している。他惑星に資源を渡すように要求しているが、それに好ましい返事を返さない星々がある。我々は諸星への見せしめと惑星の地下資源の採掘の為にそのうちの一つの星を破壊することになった」

惑星の破壊という大事を聞き、狼狽してはなかつたが仲間たちも動揺を隠せないでいる。

「一ヶ月後、お前たちの後に惑星破壊砲『オリオン』を向かわせる。そのためにお前たちは戦線を開拓し制空権を確保しろ」

出発の前日。

俺は寝付けずに薄暗い格納庫で俺の愛機であるアンタレスの点検をしていた。

「なあアンタレスよ。俺は本当に惑星を壊す手伝いをしちまっていいんだろうか？」

独白にも似た言葉をいつのまにか呟いていた。

しかし、すぐに思考を切り替えた。搭乗員に求められているのは、ただ黙って使命を果たすことだけだ。そう納得することにした。

とうとう惑星へ向けて旅立つ時が来た。

仲間のうちの一人が声を張り上げ士気が高めた。俺も仲間たちも次々と戦闘機に乗り込んだ。

徐々に俺達は目標の惑星が大きく視認できるほどの距離に近づいてきた。

まだ緑が豊かなその星を見て、俺は思わず感動のため息を漏らした。

その時、レーダに味方の機体とは違う影が映った。

——敵だ——

俺達に緊張が走る。

敵の数は俺達よりも多い。

だが……

「最新鋭の機体に、最高の搭乗員。俺達が負けるわけがない！」

一機、また一機。

俺と仲間は次々と相手機体を撃ち落としていく。ほぼすべての敵機を撃ち落とし、目標の惑星に近づいた。このまま順調に事が運ぶかと思えた。

しかし、突然、味方の機体の一つが砕け散った。ある一機の敵機体の攻撃だった

その機体が現れたことで大きく戦況が変わった。そいつは次々と俺の仲間の戦闘機を食い散らかしていく。とうとう自軍は俺だけになってしまった。

敵との一騎打ち。俺は敵の放つビームを辛うじて避け続けることができた。しかし敵も俺が当たると思ってた放ったビームを、尽くギリギリで躲かしていく。

「五角……、いやそれ以上っ！」

俺は戦闘機を扱う腕にかけては一級の自信を持っている。しかし、信じられないことに目の前にいる相手はどの技量をとっても俺をはるかに上回る腕を持っている。

少しずつだが、俺は追い詰められていく。

そしてとうとう敵の渾身の一撃が放たれる。

回避する術は無かった。

「避けきれねえっ！」

俺の機体の動力源に敵のビームが直撃した。

アンタレスと俺は、俺達が破壊しようとしていた惑星の方へ墜ちていく……。

To be continued.

俺の目的。それは、この惑星の抵抗勢力の鎮圧。その理由。それは、この惑星を破壊するため。ひいては、俺たちの惑星や、そこに住む人々のため。

……だが、俺は――。

第二章 星の求道者

STAR SEEKER

それでも戦闘機の操縦で右に出るものはいないという自負があったから、易々と撃墜されてこの惑星に不時着してしまうことになると思わなかった。

一命は取り留めたものの、全身壊れた人形のように動かない俺の前に、一人の女性が現れた。

「こんなところで一体どうしたんですか？」

彼女は、深い事情を聞くこともせず、俺のことを引き取り、誠心誠意看病してくれた。

数日間世話をしてもらい、なんとか歩けるようになった頃になると俺は彼女と様々な話をするようになっていた。

「さすがに一人暮らしはちょっとさびしくて〜」

彼女の家族は病やこの戦争で失われたという。明るく話していても、その表情からは物悲しさがにじみ出ていて、胸の奥が少しだけ締め付けられるような思いがした。

そして、来訪者は突然現れた。

「お、無事目覚めたみたいだな」

無骨な口調の女性が安堵したように言う。

「まあ、あの不時着の技術のおかげだろうな」

続けて男性が納得したようにそう言った。

しかし俺は、その二人組の内の片方にしか目が行かなかった――それは驚愕ゆえのことだった。

「な……歴代最強の女パイロット……?」

記録でしか見たことは無かったが、ここ最近休戦協定を結んだ敵国との戦闘中に行方不明として処理された、俺たちの惑星軍随一の使い手だった。

「敵のエースと一緒に行方不明になったと聞いたから、誰もが相打ちだと思っていたのに……!」

「え、何。俺のことも知ってるのか」

すると、男性が口を挟んできた。つまり、その男性が撃墜王とまで恐れられた元敵国のエースで、そして両国のエースが今ここにいるという事は……。

「もしかして、二人のどちらかが俺を撃墜したのか」

それならまだ納得出来なくはない、と思ったが。

『二人乗り♪』

肩を抱き合って異口同音に二人はそう言っただけだ。二人は相打ちして半壊した二つの戦闘機を組み上げてそのまま駆け落ちしたのだという。撃墜王と最強が組めば、勝てる者はいないとも言えるのか、と少し呆れてしまう。

「行方不明どころかなんでこんな惑星にいるんだよ」

「……この星、凄く綺麗だとは思わないか。人々が移住してから、自然界とのバランスを保ち続けているんだ。だから俺たちはこの惑星に傭兵として雇われ、お前たちを退けることにした」

穏やかな表情で男性は語る。そして逆に俺に問うてきた。

「お前は、どうしてこの惑星に攻めてきた」

わざわざ黙っているような事柄でもなかった。

「この惑星には大量の資源が眠っている。俺たちはこの惑星資源を採掘する。他の資源惑星への見せしめも含めて、惑星破壊砲《オリオン》によってこの惑星を破壊する……あと一ヶ月後のことだ」

その話をした時、俺の介抱をしてくれた彼女が、初めて脅えたような表情をした。それが、何故かどてつも嫌な感じのように感じた。

「……お前、大切なものはあるか」

大切なもの。俺たちの惑星。家族。友人。任務。

「違う――お前の心にあるか、そう聞いている」

「心……?」

一体何を言っているのか、と思う間もなく男性は畳み掛けてくる。

「俺たちがどうしてお前を撃墜してからすぐに殺さなかったと思う。お前はまた救いようがあるんじゃないかと思っただからだ。お前はただ戦闘機乗りになるために軍に入り、ただ言われるがままに任務をこなしていたんだろう。それ自体は何も間違っちゃいない。……だが、お前の心にある大切なものを、お前は求めたことがあるか? お前が正しいと思うこと、お前にとっての真実を、お前は自分で確かめることができるのか?」

改めて、その意味を反芻してみる。

俺が正しいと思うこと。俺にとって、俺の心にとって大切なこと。心って一体どういう意味だ。

俺が今真実だと思えること――。

俺は、脅える彼女の表情を瞳に映すと、毎日のように見たあの笑顔が見たいと感じた。だから――

「……俺を懐柔しようたってそうはいかない」

男性とその横に立つ女性が険しい顔つきになる。

「俺は自分の意志で自分の人生を決める……なあ」

いまだおびえた表情の顔を、まっすぐ見つめた。

「お、お前の笑顔がまた見たい……だから、俺は自分の惑星とだって戦う、だから、その――」

見つめているように思ったのに、気恥しくなっただけ視線を逸らしてしまう。

「――俺のことを、待っていてくれないか……?」

無償の優しさが、嬉しかった。だからこれはただの恩返しだ。これが、俺が出した答えだった。

「はい……っ!」

彼女は柔らかに微笑み、目元から一筋の涙を流した。

「俺が見込んだ通りだったな」

「男ってのは変なところで熱いよね」

そんな話をする二人に、俺は頼み込む。

「俺の戦闘機を直す手伝いをしてくれないか」

二人は決意のこもった瞳で見つめ返してくる。

俺たちは、無言のまま、お互いの拳をぶつけ合った。

最終章 星の救済者

そう、それは三日前のことだった。

この星のみなへの優しさに包まれていた一月月は、とても温かった。

しかし、オリオン——すべての動物を狩りつくす狩人の名を冠した惑星破壊砲——がついたという報告があった。

そして、今俺は愛機アンタレスに乗っている。そして、傍らには俺を落としたりあの二人が飛んでいる。

「敵に回すとこわいが味方にすっこんなに頼もしいとはな」

『おーい、聞こえるか、作戦の確認だが、ほんとにいいのか』

「何のことだ？」

『お前が例の爆弾を撃つ役割だってことだよ』

「……信用してないのか」

『それは違うが……』

『もう、この男は口下手なんだから。あんたのことを心配してるのよ』

「……余計な心配だ、はじめは自分の手でつける」

『そんなはじめより好きな子のために飛びなさい。制空権ぐらいは確保してあげるから。彼の時も……』

のろけになりそうな無線を切る。まったくだった二人で百機を超す軍から制空権を取るなんて言うか普通。

でも、あの二人ならやりかねないから怖い。

「それにしても、好きな子って誰のことをいってんだ？」

ぱっと浮かんだ顔をあわてて消す

「ちょっと気温調整をミスったかな」

顔のあたりが特に熱い気がする。まあ、気のせいだろう、多分。

そうこうしてるうちに交戦が始まったようだ。

「うわあ、ほんとに押してるよ」

あんな機体一機が軍の最新機体を片っ端から落としていく。

でも、さすがにきついのか制空権を取るまでには至らない。

「だが、これで十分」

敵の中央に突っ込む。右、右、左、もう一つ左。

見える、見えるぞ……戦術通りの動きだ。

人は一方によける習性がある。それを狙い撃つ戦術だ。

「だが、軍のマニユアル通りだな」

そう、だからこそ先が読める。

後ろへ回ってそのまま相手を振り切る。

『貴様か……』

その時、突然無線から突然声が聞こえてきた。

「上官殿でありますか」

『やはり、貴様だったか。まだ遅くない、戻ってこい』
死角から放たれたビームを避ける。

「それは無理であります。敵に投降してはならないとおっしゃったのは上官殿でありますよ？」

コンソールを一瞥もせずに撃ち返す。

『貴様……いくらで翼を売ったア！』

「上官殿にはわからねえでありますよ。小隊の仲間たちを出世の駒としか考えてねえクソ上官殿にはな」

『なに』

「——チエックメイトだ」

『待て貴様！』

そして、抜き去る。それと同時に過去も置いていく。

そんな時、目的地が見えた

惑星破壊砲「オリオン」とよばれるそれは、

あまりにも大きく……おぞましかった

「狩人オリオンはたった一匹のサソリにやられたんだ」

思わずすくみそうな体に気合を入れる。

この翼には、あの星の命、そうたくさん命がかかっている

「いや、ちげえな」

そう、ちがう

「俺は、俺は……あいつの笑顔をもう一度見るまで墜ちるわけにはいかないんだ」

迎撃砲火の密度が濃くなっていく

「右翼二被弾ンマシタ。」無視する。

「損傷率00:00……危険領域二突こ」無視する。

「特殊弾頭弾発射装置ノ反応ガアリマセン。」

無視……できないな、これは。

「ちっ、ついてねえな」

目の前に「オリオン」のコアが見えているのに俺はこうも無力なのか。また俺はこのぬくもりを失うのか。

その時、天啓にも似たひらめきが俺の脳内を駆け巡る。

「アンタレス、もう少しがんばってくれ」

発射装置が故障してるのならそのまま爆弾をあのとてっばらに持っていけば問題ない。

「あいつ、待ちくたびれるだろうな」

その時、思い浮かんだ顔はほかの誰でもないあいつの笑顔

「これで終わりだア」

——ただいま——

——おかえり——

冥王星
『冥夜の旅』

病室の窓から、

夜空に浮かぶ星を見る。

——私は、夜空が好きだ。

なぜなら、私が動けなくても、

彼らが少しずつ動いてくれるから。

カーテンの檻から瞬く彼らは、私にとって希望の光。

朝に沈み、夜にまた昇る。彼らの永遠のサイクルに、私は懂れた。

皆既日食が見られる夏の日、私はナースに頼んで屋上に連れて行ってもらった。

私にとって、それは小旅行。白い雲を眺めながら、辺りが暗くなるのを待った。

……そして、私は見たのだ。月の影にうっすらと浮かぶオリオンを。

夏の空を漂う彼は、まるで異世界に迷い込んだ少年のよう。

その時間はとても短いものだったけれど、

無性に彼を追いかけたくなって、

私も長い旅に出た……

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	星あいの儀	3 pt	5 位	0 sp
		<p>しっとりと純情。 星あいという古風な言葉、そしてカササギという優雅さがいい効果になってます。 カササギって何？という班がありましたが（C班）、常識だよな、うん。</p>		
02	何が★いの？	0 pt	9 位	0 sp
		<p>☆☆まみれのメールに敢えて★つきでアドバイス・メッセージを送るというジョークが効いてます。アカウントの共用を許しちゃうなんて、ひょっとしてこれは出会いの第一歩?? 記号の楽しさがウケて、今週のイチオシフレーズ大賞です、おめでとう! イチオシフレーズ：「何が★いの？」×2 「【★お世話になってます★】」</p>		
03	金色の星	13 pt	2 位	1 sp
		<p>金星に行った発想ナイス！ 無心でつかんだ大金星までの流れの組み立てがとてもていねいで、立ち会いの瞬間の心理描写もよく練られていて、クライマックスで一緒に横綱を押したくくなります。 いいですね、ハートウォーミング。横綱には首位を譲ったけれど、大健闘の準優勝です、おめでとう!! 特別賞：明賞 from A班（相手の横綱はきっと野球賭博的に明星山の身の上話を知っていたと思う）</p>		
04	宇宙船地球号の一年	24 pt	1 位	0 sp
		<p>なあるほど、そんな見立て。 タイムスケールもていねいに刻んであって、別視点での地球史を楽しめます。 誤植はなくなるながらも、2位にダブルスコア近い圧勝で2連覇となりました。おめでとう!!! でも、3連覇は阻止したいよねっ、皆の衆。</p>		
05	星と文明	7 pt	3 位	1 sp
		<p>隠すことで魅力が増す、まさに文明。身近な話題から歴史へと、いい流れでまとまっています。まあ、テレビの星マークにそこまでの意味が込められているかは疑問ですが。 なんちゃってながらも正統派粋で本選入りしてブロンズ・メダルです、おめでとう！みんなもっと正統派書こう！ 特別賞：アホ賞 from C班（そのまんま） イチオシフレーズ：「隠す意味」</p>		
		3 pt	5 位	3 sp
		<p>宇宙空間を遮るでっかなでっかな大鏡。そうか憧れのあの星は実は地球だったんだ。壮大なる発想が楽しい。</p>		

06	鏡	ガンマ線ツッコミまで登場し、宇宙への夢、誘っていただきました。 最多特別賞です、おめでとう！ 特別賞：超高性能で賞 from E班（望遠鏡が高性能すぎるから） おいしいで賞 from H班（タイトルでオチがわかってしまうのが残念） ガンマ線放射したで賞 from I班（あんた頭良いな～）
07	プラネタリウム	6 pt 4 位 1 sp
		これはまったく予想外のところを突いてきました。 星から吹き出物へ。その落とし方のばかばかしさに乾杯！ 特別賞：アクネスしま賞 from D班（これであなたも小池徹平☆） イチオシフレーズ：「俺の吹き出物。」× 2
08	第1章星の破壊者 Star Breaker	0 pt 9 位 3 sp
		お話の始まり始まり。 トップバッター、設定を説明しつつ後半で空戦の緊迫感へ。熱く華々しい幕開けです。 あまりの偶然に驚いたみんながくれた最多特別賞をチームで受賞です、おめでとう!! 特別賞（すべて8-10三作品へ）：フォントそろえま賞 from B班（そろえてほしかったー） 星の連作者賞 from F班（自明） 長編大作賞 from J班（素晴らしい偶然を目の当たりにしました!!!!） イチオシフレーズ：「To be continued.」
09	第二章星の求道者 STAR SEEKER	1 pt 8 位 1 sp
		つなぎパートはしつとりとLOVE。 「二人乗り♪」がハモって笑いました。おー、そうきたかの人間模様。 「男つてのは変なところで熱いよね」の名セリフで次へ。 特別賞：単体でもいけるで賞 from G班（他2つよりきわだっていた。） イチオシフレーズ：「To be continued.」 「第二章星の求道者」
10	最終章星の救済者 Star Saver	0 pt 9 位 0 sp
		ラストにふさわしい華麗なるエンディング。 戦闘のスピード感そのままにスタイリッシュに駆け抜けて鮮やか。 イチオシフレーズ：『待て貴様～～』 「これで終わりだア————」
11	冥夜の旅	3 pt 5 位 0 sp
		病床という非日常。さらに昼に輝くオリオンという非日常を重ねて、ユニークな光景を作り出しています。 ラストが唐突すぎの感がありましたが、そうですか、生命力のゲージだったんですか。